
コミュニティ心理学を考える

— Martin-Baro (1) —

藤 信子

7月下旬に横浜で開催された第31回 ICP (International Congress of Psychology) に参加した。そこでのラテンアメリカの心理学に関するシンポジウムに出てみた。ラテンアメリカの心理学に関しては、解放の心理学の創始者である Martin-Baro のことしか知らないけれど、ラテンアメリカの心理学のことがもう少し知りたいと思っていた。そうすると、最初の話題提供から、Martin-Baro の写真が出てきた。Columbia から2名、

Argentina から1名、Spain から1名の話題提供があったが、その中の3名までが、Martin-Baro に触れたことに驚いたのだけれど、私がおのれくらいラテンアメリカの心理学事情についてわかっていないということなのだろう。

ここまで前提無く Martin-Baro と書いてきたけれど、このマガジンでは、彼の唯一の英語版である “Liberation for Psychology” をここ数年大学院で読んでいることに触れている。ここで

Portillo(2012)を参照して、まとめてみたいと思う。Martin-Baro は 1942 年スペイン生まれで、イエズス会（カトリックの修道会、日本人によく知られているのは、フランシスコザビエルの名前だろうか）に入りエルサルバドルに派遣される。イエズス会での修練の教育の修了後、彼はエクアドルの大学で古典人文科学を 2 年間学んだ後、コロンビアの大学で哲学を学ぶ。そしてそこで心理学と出会う。最初の論文は、心理学的治療への Carl Rogers の非指示的アプローチの再検討だった。人間性心理学に加え、彼は実存心理学や精神分析精神療法にも関心を持った。特に Viktor Frankl に強い影響を受けた。その当時 EL Choco のジャングルの中でアフロコロンビアンの地域社会で聖職者として働いていた彼は、ロゴセラピーや実存主義の観点から、権利を奪われた人々の中にある運命論の社会的原因を理解しようとしていた。Frankl の助言で USA でまず実験心理学を学ぼうとしたが、修道会の慣行ではそれは許されなかった。そして 24 歳の時にエルサルバドルに帰り、イエズス会の学校で働いた。その後イエズス会の教育で要求される神学を学ぶためにフランクフルトに行く。ここでは彼は解放の神学の主な人物である Jon Sobrino と同時期を過ごしている。

UCA(University of Central America、エルサルバドルのイエズス会と支持者のよって建てられた大学)で神学を学びながら、彼は心理学を再び正式に学んだ。その時のメンターが、インスブルックで応用心理学と精神分析を学び、熱烈なマルクス主義的社会心理学者の Jesus Arroyo Lasa だった。1972 年に彼は Central American Students の編集委員長になった時には、26 編の論文を書いていた。UCA における心理学の学部教育を卒業してすぐに、合衆国での大学院教育のために、Fulbright 奨学金を取った。1977 年に社会科学の修士、1979 年に社会組織心理学の博士の学位を Chicago 大学から授与された。ここまで Portillo の記述に従って Martin-Baro が学んだことを追ったのは、彼を解放の心理学へと導いた一方の教育について見たかったからである。

彼がエルサルバドルに帰国した翌年 1980 年にオスカル・ロメロ大司教がミサの最中に極右に殺された。反政府ゲリラ各派は FMNL (ファブランド・マルティ民族解放戦線) を結成し、政府軍と内戦状態になった。この時 USA (レーガン政権) は、50 人規模の軍事顧問団をエルサルバドルに送り込み、政府を支持した。この USA の中南米を自国の裏庭 (backyard) という考えで、キューバのように

社会主義国となることを防ぐために、いろんな干渉をすることに関しては、呆れるような感じを持つけれど、伊藤千尋の「反米大陸—中南米がアメリカにつぎつける NO!」(2007)を読むと、合衆国政府の背後にある大資本の勝手さというか、凄さに触れて、この執拗な介入が一応わかる。わかると書いたのは、理解できるという意味ではない、資本主義の怖い面を見ることができるということである。そして余談ながら今の日本も危ないなと言う感じを持つ。

内戦の中で、彼は夜中に爆弾の音で目が覚める体験などを通してサルバドルの人々の苦しみと闘いを共にした。イエズス会の神父たちは、殺害の脅しを受けており、彼らの生命の安全の為に、国を離れることを命令された。彼らはオスカル

・ロメロ大司教と数名の神父と修道女を殺害していた。Martin-Baro はエルサルバドルの社会的変化のために、彼の知識を活かそうと考えた。彼は大学のいくつかの仕事をこなし、一方で彼が神父として働く村の生活の中で幸せだった。彼は、貧しい人々を慰め、力づけ、彼らの物質的生活と精神的な状態を改善することを援助した。子どもたちは彼が毎週末来て甘いものを持ってきてくれるのを待っていた。

文 献

Portllo, N. (2012) The Life of Ignacio Martin-Baro: A narrative Account of a Personal BiographicJournay. *Jounel of Peace Psychology*. 18(1), 77-87.

伊藤 千尋 (2007) 反米大陸—中南米がアメリカにつぎつける NO!集英社新書.